

題名：I wish ～もう一つの奇跡～

作：聖乙女エルニーニャ ロウ (PN：刹那 漣)

『女神様、お願い致します。彼を救ってください・・・』
『女神様、僕の願いが許されざる事であるのは分かってます。でも聞いてください。』
『女神様、出来る事なら何でもします。身代わりを望むなら、僕が喜んで代わります。』
『女神様、だから・・・だから、僕の親友を助けてください！！』

まだあどけなさの残る金髪の少年は、毎夜この古びた道場の前で祈りを捧げていた。手には必ず、少年の親友の形見分けである刀が握られている。

「花を手向けても、きっと君は喜んでくれないよね。」

少年は、目に湛えた涙がこぼれぬよう月を仰いだ。ここで女神に祈りを捧げるようになってから、どれくらいの時が流れていったらだろうか。どれだけ祈りを捧げた所で、親友の罪は永遠に消えないだろう。分かってはいても、悔やまずにはいられない。

——あの事件さえ無ければ・・・あるいは彼が生き抜いてくれたなら。

自分の出来ることは、せめて魂まで汚されぬよう祈り続けるだけ。少年の口惜しさは、祈る度に積もってゆく。永遠に溶けぬ雪のように。

そんな穏やかに満月が全てを包むある日の夜、いつものように女神に祈りを捧げた少年が家路につこうとする時、目の前に一人のたおやかな女性が佇んでいた。

『貴方は、その少年を救いたいよね？』

少年は頷いた。この世の者とは思えぬ程美しいその女性は満ち足りたように微笑む。

『ならば、奇跡を信じなさい。物事にはあらゆる可能性があるのだから。』

奇跡とは何か、可能性とはどういう事なのか。聞きたい事は沢山あるが、この女性の前では何一つ口にすることが出来なかった。

『私を信じて。私の奇跡を信じて。結果は一つではない事を信じて——』

言い終ると、あたり一面が光に包まれた。少年と女性は、抵抗する機会さえないまま光の中に溶け込まれる。

そして辺りには、ただ静かに古びた道場だけが夜風に吹かれていた。

——フレイルはキンケイ城下、オトトイ団子屋。

勇気の武を司るクシナ女神を祖とするこのフレイルは、このダイナスティア大地に存在する4つの国の中でも一風変わった個性をもつ地であった。「着物」や「浴衣」をはじめとする独特な衣食住の文化がこの城下町で花開き、地方へと転じる。このオトトイ団子屋も、「あん団子」「みたらし団子」といった他国では口にできない甘味を扱う老舗であった。

そんな有名な甘味処で、地元の娘なら見る機会もない衣装に身を包んだ4人の乙女達がかしましく談話している姿は、良くも悪くも周囲の目を引いていた。

「・・・やっぱり場所を変えた方がよろしかったかしら？周囲の視線を感じますわ。」

銀糸のごとく輝くブロンドのウェーブヘアーがさらりと揺れた。まるでビスケットのような彼女は少し回りが気になるようである。

「どこだって同じですよ。私達が聖乙女である限りはね。」

艶やかな濃紫色の髪を束ねた美女は、そう言って手を組替えた。爪先から足先までまるで芸術を司るミツハ女神の国、グレイルの彫刻のような造形美を湛えている。造形美と言っても彼女が持つ自然の美に相違ないのだが、これで目立つなという方が無理な話である。

聖乙女——彼女達は大聖母リデルにより様々な世界から、このダイナスティアの地に降臨するように選ばれた特別な乙女達であった。それ故にこの地の住人達は、女神の御使いとして彼女達に当然のごとく敬意をはらう。また年頃の娘達にとっては、一部を除いて美しい憧れの象徴でもあった。

「ごめんなさいね、みんな・・・私の為に迷惑をかけてしまって。」

本当に申し訳なさそうに、美しい声色の乙女が頭を下げた。今でこそ大きな瞳は伏せめがちだが、どこか惹きつけられる魅力を持つ少女だった。

「キアラさんが謝る必要はありませんわ。運が悪かっただけですもの。」

「そうですね、キアラさんのお仕事に比べれば私たちは殆ど観光の領域ですし。」

キアラという名前を聞いて、周囲が少し色めきだつ。彼女達は慌てながら、今回のフレイル入国は『興行』である事を改めて思い出した。

キアラと呼ばれた乙女——聖乙女キアラ＝スターはダイナスティアの地で知らぬ若者はいない程の人気アイドルである。数ヶ月前、悲しみに暮れる住人達を慰めるために彼女は『ちやりてい』と称して舞台の上で歌を歌い始めた。聖乙女がもたらした外来文化に最初は戸惑っていたダイナスティアの人々であったが、彼女の心に響く歌声に魅せられ次第にうちとけていった。

今回は初のフレイルでのライブであった筈なのだが、彼女に過干渉する敏腕マネージャーが病気で倒れてしまい、日ごろからキアラと親しくしていた聖乙女3人が急きょスタッフとして指名された。ライブの日程まで少し余裕が出たので、早めに現地入りして観光をゆったり楽しむ予定だったのだが。

「うかつでしたわ・・・わたくしとした事が。」

ブロンドの髪をかきわけながら、彼女は盛大にため息をつく。

「そうですね、少しは彼女を見習わなくては。」

一方涼しげな顔をしている美女は、隣の少女を見て微笑みつつ答えた。愛らしい顔をした赤毛の乙女は、先程から無言のまま団子を平らげている。

「あの～、お兄さん『みたらしとあんこの三色団子』、もう一皿くださいーい！！」

「お客様・・・そのう、聖乙女様にお金を頂くわけには参りませんので代わりに・・・」

もう何回この台詞を自分は言っただろうか。半分嫌気すらさしながら、給仕は何十枚も重ねられた団子皿を片付けつつ少女に問い掛ける。全て言い終わる前に、目の前の小さな聖乙女は左手の串を桃の花に変えてみせた。

「はい、聖乙女の祝福付き桃の花。これであと何皿大丈夫？」

——お願いですからもうお帰りになってください。

少女が見せた小さなマジックをほかの客が拍手喝采を送る中、その給仕だけが心の中でつぶやいていた。勿論口に出しては言えないけれど。

「・・・彼女の食欲はどこから来ますの？それに、私達聖乙女はタダで何でも頂ける代わりに莫大な精神力を費やして祈祷を行いますでしょ？私、御土産をもらおうとしても9皿が限界でしたわよ。あの根性はどこから来るのかしら・・・。」

「まあまあ、どうやらあの子は『私達』とはまた別の世界からやってきたみたいなの。私も最初は驚いたけれど、精神力だけは尽きないらしくて。」

キィラは精一杯友達のフォローに回る。流石にキィラ以外はお互い初対面だという状況もあってか、理解できない事情の一つや二つはあるようだ。

「私も彼女の精神力には興味ありますねえ。メタモキッチン以外で即席メタモリングをやったのけた聖乙女は始めて見ました。」

メタモリングというのは、大聖母リデルが生活に不自由しないよう聖乙女だけに与えた特別な魔法である。通常はメタモキッチンと呼ばれる自室の一部でしか使えない魔法なのだが、この食欲魔人のような聖乙女はメタモステッキ振りて先程桃の花を出してみせたのだった。

「どんな世界でも魔法の根本的な因果律は同じだよ。法則を抑えたら後は簡単。」

ぽつりと赤毛の少女は団子を頬張りながら言ったが、あまりの周りの盛況ぶりに彼女の言葉はかき消された。その時。

「てえへんだ！てえへんだ！！辻斬りが出たってよお！！」

和やかな雰囲気の中にもたらされた町方の不吉な報告は、一斉に全ての客の言葉を止めた。皆目を泳がせながら、これからどうするべきか指示を待っている。

「とりあえず街人は家に帰えんな、1歩も外に出ちゃならねえ！！あとは外来人なんだが、これは近くの宿屋で保護するようにとのお上の通達だ。まあ近くの『新鳩楼』にでも避難してくんな。女将には話、通してあるから。」

青ざめた客人は、急ぎ足で家路を急ぐ。店も片付けやらお勘定やらで聖乙女へ対応する余裕すらないようであった。困った乙女達は、従業員には聞かれないように密やかに話し合う。

「私達・・・ちゃんと寮まで帰れるかな？」

「無理でしょうね。この非常事態に外出していた事で、フレイルの寮長に呼ばれそうです。」

「向こうもわたくしたちを聖乙女だと思っていないようですし、宿屋でお世話になる方が無難だと思いますわ。」

「ねえ、お団子いくつ御土産もらっとく？」

『要りません。』

約一名を除いて、聖乙女達の気持ちが一つになった瞬間であった。

そして数分後、4人の聖乙女は無事湯宿「新鳩楼」に到着した。

「ではあっしはこれで失礼いたしやす。どうぞお気をつけて。」

乙女達を護衛してくれた町方は、彼女達に一礼すると忙しそうに宿を出て行った。町方を見送った後、また乙女達の作戦会議が始まる。

「宿帳・・・どうしますの？わたくしたちが聖乙女だと分かったら大変な騒ぎになりますわよ。」
「偽名記帳が無難でしょうね。でも私たち、いつもタダで物をもらっている身分ですから路銀なんてありませんけど。」

「物納したらどうかしら。皆さん、何か高価なもの持ってませんか？」

「ごめんなさい・・・物騒だからって、マネージャーが装飾品を管理しているの。今日は勿論お忍びだから何も目立つものは・・・。」

「私も生憎、フレイルには宝飾品は持ってませんね。」

「まあ！！わたくしもですよ、どうしましょう・・・。」

各々が自分の置かれた状況にため息を漏らす。たとえ特別待遇であっても、『聖乙女』の看板を下ろせばただの庶民と変わらない。

自分達が聖乙女である事が、こんな時に災いしようとは——乙女達が考えあぐねている時、隣で今まで団子を頬張っていた約一名が名乗りを上げた。

「私、シトリンなら二つ持ってるよ？あと絹布が2枚、洋服で良かったら100%シルク製パーティードレスとかあるけど、これで宿代足りそう？」

「充分ですわよ！！というか、何故こんなに持っていますの？」

「グレイトで出したの。結構出るよ。」

「・・・もしかして妖精と闇取引しているとか言いませんわよねえ・・・？」

「秘密。」

赤毛の少女は、ポケットからシトリンの天然石を取り出す。それを見て安心した乙女達は記帳に向かう。

「そういえば、名前はどうしますか？」

「私書きます。そもそも誘ったのは私なんだもの。」

キアラが前に出て、サラサラと自分の名前を書き込む。本当の聖乙女名を。

『ちょっと待ってください、正直に聖乙女名なんて書いたら即行寮帰りですよ?!』

この中で最も冷静に構えている美女が、この行動派アイドルに待ったをかけた。

『だって嘘は書けないでしょう？みんなを巻き込んでしまったんだもの、寮長のお叱りは私が受けるわ。』

『しかし・・・』

『これくらいの償いはさせて。ね?』

情のツボを押さえた彼女の笑顔は、友だち達を黙らせる程に効果があった。記帳を終えた乙女達は仲居に客室へと通される。

「これが観光だったら最高なんですけどねえ・・・。」

心身の疲労が祟ったのか、一番冷静だった彼女がぼつりと漏らす。

「そういえばキアラちゃん、あの二人ってどんな人？私、名前も知らないのについてきてよかったのかな。」

赤毛の乙女は、机に置いてある茶菓子をつまみながらキィラに話し掛けた。

「ああ、ごめん。自己紹介がまだだったよね。左から・・・」

「自分で言えますわ。わたくしの名はアイリーン。皆さんこれからも宜しくね。」

ビスクドールのような彼女が優雅に微笑む。幾重にもレースやシフォン生地を重ねた美しい衣装を身につけており、清楚なお嬢様としての理想像のような雰囲気があった。

「私はフィシュタリア、長いからフィタで構いません。どうぞよろしく。」

涼やかな顔の美女は、そう言って髪をかきあげた。その仕草一つでも絵になってしまう程の端麗さが伺える。

「私はえーと・・・アナーニャ。まあ特技は食欲と迷子ですが、よろしくですよ。」

赤毛の少女は、その愛らしい顔でにっこりと微笑んだ。決して残り3人のような美人ではないが、くせの強い外ハネショートボブのヘアースタイルもあってか、表情が可憐に見える。

「食欲って、特技ですか？」

「あそこまで食べられるのなら最早特技でしょう。羊羹王との対決を是非見たいですね。」

アイリーンとフィタは、そう言いながらいそいそと着替え支度をはじめていた。

「ちょっと待って、みんなどこに行くつもり？外は非常事態なのよ？」

恐らくここに居る一番の常識人、キィラが二人に注意を促す。

「非常事態だからこそこのチャンスですよ、わたくし一度で良いからフレイル式のスパを体験したかったですもの。」

「そうですね、聖乙女のままだと温泉にも入れませんしね。」

「ねえねえ、『温泉』って何？？私も行くー！！」

キィラ以外の3人は、この非常事態を楽しんでいるようであった。キィラは彼女達の責任者になってしまった自分に少し後悔したが、言ってしまったものはもう取り消せはしない。

「キィラちゃんも行くでしょ？」

「・・・いえ、私はここに残るわ。なにか連絡あった時のために、留守番がいたほうが良いと思うもの。」

「ええー！？」

キィラは残念そうに首を振ったが、温泉の誘惑に負ける気はないらしい。

「キィラさんの場合は、有名すぎて温泉場にもなかなか行けないんですよ。すいません、では留守番お願いしますね。」

「ええ、くれぐれも気をつけてね。」

心配そうに見守る友達を尻目に、初対面のはずの3人は仲良く湯治場へと向かっていった。

「はあ～いいお湯だったね。」

夜桜がはらはらと散る中、軽快に下駄の音を鳴らしながら赤毛の聖乙女が二人の乙女に話しかけた。浴衣姿のブロンド美少女と艶やかな長髪の粹な美女——アイリーンとフィタが無言でうなづく。

彼女達聖乙女は何も不自由しない代わりに行動の自由もある程度は制限されてしまう。たとえ緩やかな規制であろうとも、一般の町娘のように銭湯に通うような真似は世間が許さないだろう。だからこそ、彼女達の幸福感は一言では語りつくせないものがあった。

「このような石段での夜桜見物も、風情がありますね。」

普段はあまり表情が変わらないフィタの顔が綻ぶ。空を見上げると、まるで雪のように桜の花びらが夜闇の中を舞っていた。

「お気持ちは分かりますけど、不謹慎ですわよ二人とも。今は折しも辻斬り騒動の警戒中。た

「I wish ～もう一つの奇跡～」

とえ宿の敷地内といえど油断はなりません。置いてきたキィラさんもしんば・・・」
「危ない！！」

パキンッ

マイペースな二人に注意を促していたアイリーンは、ふいにアナーニャに左手を引き寄せられた。先ほどまで聖乙女の居た場所では、反動で脱げてしまった下駄の片方がきれいに二つに割れている。

「・・・思ったより察しが早いな。妾の存在に気づいておったか・・・。」

声は上のほうから降ってきた。3人が振り向くと、桜の木の幹の上に漆黒の長い髪をたなびかせた美しい、だが氷の如く鋭い気配をまとったフレイル風の女が腰掛けていた。

「何をなさいますの?!」

アイリーンが気丈に反論をしかける。

「ふふふ、妾が怖いか・・・所詮リデルの使いなぞ、その程度。」

大聖母を呼び捨てた漆黒の衣の女は、青磁の肌に鮮血で染めたような唇を歪ませて微笑を浮かべた。

「あなたは何者・・・いえ、『どのような』モノなのですか？」

「ナイトメアだよ。」

険しい表情で詰問したつもりのフィタの問いは、意外な人物から答えが返ってきた。

「ほほう、聖乙女。妾の存在を知るか。」

「瘴気を隠しもしないナイトメアの化けの皮を剥ぐなんて簡単。自分をアピールするつもりならもっと穏便にやってほしいけれど。」

幼い顔つきの聖乙女——アナーニャを見下すように女は鼻で笑った。

「アナーニャ、貴女あの気味悪い小母さんと知り合いだったんですか？」

「・・・フィタって時々とんでもない毒を吐くね。こんな趣味悪い知り合いなんて居ません。」

「冗談が過ぎましてよ、二人とも・・・本当に無礼をお詫び致しますわ、おばさま。」

アイリーンが最後に痛恨の一言を放つ。今まで黙って聞いていたナイトメアであったが、自分が侮辱されているという事実に気づき、怒りの形相を見せはじめた。

「黙って聞いておればつけあがりよって！良かろう、今回は余興のつもりであったが余程妖魔に魅入られたらしいな。すぐに貶してくれるわ！！」

その言葉と同時にナイトメアの漆黒の髪が鞭のようになり、今度はフィタに向かって伸びてきた。フィタは石段を転がりつつも、紙一重でこれをかわす。

「チィ、ちょこまかと！！」

「残念ながら私は闇に魅入られるわけにはいきませんからね。」

冷静に言いつつ立ち上がったフィタであったが、それが強がりであることは妖魔には見抜かれていたようだ。桜の幹からふわりと降りた妖魔は、薄笑いをしながら彼女を次第に追い詰めていく。

「アナーニャ、何とかありませんの?! さっき花を出したように、今度は月剣を出してくださいな！！」

「何気に物騒だよアイリーン！大丈夫、私に考えがあるから。」

残された二人は妖魔には気づかれていないらしい。アナーニャは懐からメタモステッキを取り出して魔法の準備をはじめた。

彼女の周りの風が動いた。ロッドを中心として、魔力であろう光がほどばしる。同時に桶を持っていたはずの反対の手に何故か抱えられたメタモ辞典が、風に煽られて開かれた。

「腐ったエメラルド、分ける、ちょっとのSUCCESS！『石』！！」

メタモ辞典から光の柱が発生し、次の瞬間ナイトメアに向かって石垣さえ組めそうな大きな石が降り注いだ。不意を突かれた妖魔であったが、それでも一瞬早く立ち退いた。

「メタモ職人だった先輩方の、血と汗と涙の結晶を思い知れ！！」

『宝石を分ける』などという発想自体が斬新だった時代には、聖乙女メタモ職人の方々は断腸の思いで宝石をメタモ窯に入れては腐らせたものであった。その腐り物処理で出来た石は、ある意味乙女の勇気の証でもあったのだ。

アナーニャの捨て台詞は、恐ろしいほどのリアリティでその場に居合わせたすべての者を圧倒した。妖魔が呆けている間に、フィタは満身創痕になりながらも二人のいる場所へ逃げ込む。妖魔もそれを追うが、自分を襲ってくる石がそれを許さない。

「クッ、追うのは無理か。まあ良い、あの少年はもう落ちるだろうし、泥の御前への時間稼ぎはもう十分であろう・・・聖乙女よ、憶えておくれがよい。人とは神を崇めながら落ちることを望む生き物なのだ。」

妖魔はそういい捨てると、夜闇に溶け込んで消えた。残ったものは夜桜の花吹雪だけであったが、妖魔が触れていた木の幹の先だけはすべて壊死していた。

キィラが留守番していたはずの部屋に戻ると、もぬけの空であった。ただ机の上に一枚の紙切れが置いてある。フィタがその紙を拾い上げ、字面を読み上げた。

『やっぱりフレイルの寮母さんに見つかってしまい、セッカちゃんの護衛で寮へ戻らなきゃいけなくなりました。3人の事は話してないので大丈夫、くれぐれも無茶だけはしないでください。キィラより』

セッカとは、ギンガという場所で日々格闘技の修行を行っている少女である。今回の辻斬り騒動で、フレイルの町方衆だけでは巡回の手が足りず、彼女達ギンガの門下生も一時的に協力しているのだった。

「まあ、わたくし達が温泉に入っている間にキィラさんが拉致されたなんて・・・」

読み上げられたメモをのぞきつつ、アイリーンがつぶやいた。

「この場合、『拉致』ではなく『保護』だと思いますがね。私たちも実際襲われましたし。」

そう言ってフィタは机のそばにしゃがみこんだ。今の彼女は全身傷まみれで、お世辞にも『聖乙女』の姿には見えなかった。

「そだ、フィタの傷を治すのが先だよ。祈祷でなんとかかな？」

同じく傍に座ったアナーニャが、フィタの腕の傷口に祈りながら触れてみた。すると、実際にフィタの傷口がみるみる塞がっていく。アイリーンもそれに続いた。

「I wish ～もう一つの奇跡～」

「・・・ありがとうございます。あの時、アナーニャが機転をきかせてくれなかったら本気で危なかったですからね。感謝しますよ。」

「いあいあ、気にしなくていいよ～。二人は多分、あういう場面には慣れていないと思うし・・・」

「あら、キアラさんから『私達とは違う世界』から降臨されたと伺いましたけど、貴女の世界ではナイトメアが闊歩してる世界ですか？」

フィタの傷を癒しながら、アイリーンはアナーニャに問いかける。だが、すぐに返事は返ってこなかったが、一呼吸置いて、アナーニャはゆっくりと口を開いた。

「・・・このナイトメアと私の世界の魔族は違う生き物だよ。本質は同じでも。」

彼女らしくない低く小さな声で答えた後、アナーニャは俯いた。状況を静観していたフィタがすかさず口を挟む。

「異文化コミュニケーションというやつですね。アナーニャ、今度あの魔法教えてくれませんか？あれがあれば誕生日会の一発芸にはもってこいですし。」

「そ、そうですね！わたくしもロサを沢山出先で作れたら助かりますわ。」

アナーニャの様子から何か触れてはいけないものを聞いてしまったような気がした二人は、慌てて話題を変えようとする。

「いや、あれは私の知っている魔法を応用しただけだから・・・二人には無理かも。魔法とか、今まで居た世界では使ったことないでしょ？」

「そうですねえ、わたくしもダイナスティアに来てから魔法の存在を知りましたし。」

「まあこちらでメタモラ級の発明といわれている道具は、わんさか溢れてはいますがね。」

「アイリーンもフィタも、大変な世界から来てたんだね・・・」

「文化レベルが違うだけの話ですよ。それが良いのか悪いのかは分かりませんが。」

しばらく雑談していた3人だが、フィタの傷もある程度治ったところで祈りをやめた。アナーニャ以外の2人は憔悴しきっていたが、彼女だけは涼やかな顔でマゴメル茶を淹れて備え付けの茶菓子を食べていた。

「やはり信じられませんか・・・貴女に限界という言葉はありませんの？」

肩で息をしながらアイリーンはつぶやく。

「私は、食べ物さえあればだいじょーぶ。」

そう言って少女は余裕の笑みを見せた。あまりの疲労感に畳の上で体を横たえていたアイリーンとフィタだったが、ふとフィタが思い出したように口を開く。

「そういえばあの妖魔、気になることを言っていましたよね？」

フィタに言われて、二人は改めて先ほど襲ってきた女妖魔の言葉を頭の中でめぐらせた。

「なんか、『あの少年はもう墮ちる』とかほざいていたよねえ？」

「『時間稼ぎ』がどうとかも言っていましたよ。『泥の御前』とか。誰なのかしら？」

おのおのが体勢はそのままに、さっきの妖魔の言葉を吟味する。しばらくして、何かに気づいたようにフィタが顔を強張らせた。

「泥の御前って・・・もしかして泥姫の事じゃありませんか？」

「！！」

一気に場の空気が緊張する。『泥姫』というのは、以前からフレイルを闇に貶めんとして暗躍

していた妖魔であった。以前ウトウ家旧家の片隅で『水姫』『砂姫』とともに存在が確認されており、聖乙女の間でも注意を促されている存在である。

「『泥の御前』という言い方からすると、あの妖魔は泥姫の部下という可能性が高いですね。」
「お待ちになって。だとするとこの辻斬り騒動、あの泥姫が関わっている事になりますわよね？」

「泥姫だけじゃないかも。どっちにしても普通の人々が太刀打ちできない相手のような気がする。早くどうにかしないと手遅れになる可能性も・・・」

乙女たちは立ち上がった。すばやく身なりを整え、宿の人間に見つからないようにこっそりと外へ出る。大通りを横切って診療所の裏側にさしかかったところで、アナーニャの持ち物袋から何か光り始めた。慌てて彼女は光るものの正体を探し出す。

そして、光るものの正体は太陽のロッドであった。
「太陽のロッドの一部が光ってる・・・これって一体?!」

3人がロッドを注視した、その時であった。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

女性の甲高い悲鳴が響き渡った。北東にある、五重塔あたりからだった。乙女たちは反射的にそちらに駆け寄っていく。無論ロッドはアナーニャが握ったままだ。

駆けつけた先で見たものは――

ダイゼン将軍の第一子レイヴンが修羅の形相をした少年を斬りつけた瞬間だった。

『あの少年はもう随ちる』

信じたくなかった。だが、彼女達は残酷な現実を突きつけられる結果となってしまった。あまりの衝撃で、乙女たちは暫くその場で立ち尽くしていた。

「シューラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

街人らしかぬ黄金の髪を振り乱して、少年が叫ぶ。少女と見まがうような、美しい少年だった。

実の兄が斬った殺人鬼の顔には見覚えがある。忘れるはずがない。少年にとっては剣技の先輩であり、親友なのだから。

「なりません！ロビン様！！」

ロビンはそのまま、黒装束の供の制止を振り切って先ほどまで修羅となっていた友人のそばへ駆け寄る。

「・・・どうして殺した？まだ助ける方法は残っていたかもしれないのに・・・。」

ギンガ門下のもと思われる修行着を身につけた青年が、先ほど少年を切った若き侍――レイヴンに迫った。

「助ける？そのような都合のいい方法があるのなら、あの修羅鬼はこのような醜態を晒してはおるまい。慢心するな、ギンガよ。」

「！！」

褐色の肌の青年が将軍の子息に襲いかかろうとした拳は、同じくギンガの装束をまとった少女によって遮られた。

「やめてノスリ！！」

「放せセッカ！！何故止める！？」

「・・・悔しいけど、彼の言い分は正しいと思う。せめて、せめて私たちがもう少し力があつたなら、彼を・・・シューラを助けられたかもしれない。でも駄目だった。」

少女の瞳から、大粒の涙が零れる。その雫はそのまま頬をつたって大地に落ちた。

「結局『殺す』方法しか見出されなかった私たちに、彼を責めることはできないよ・・・！」

ノスリの手を止めたまま、セッカは涙が飛び散る勢いで首を左右に振る。その光景をなす術もなく見守っていた聖乙女達もまた、瞳に涙を湛えていた。

「何とかありませんの？！わたくしたちは聖乙女ですよ？！」

感極まったアイリーンが、フィタの肩を激しく揺さぶる。

「・・・いくら聖乙女であっても、生死の境を侵すことはできませんよ。どんな人間にだって、死は等しく訪れるものです。・・・どんなに無慈悲でも、ね。」

フィタはあえて感情を抑え、力なく答えた。隣で立ち尽くしていたアナーニャもまた、無言のまま悲劇の光景を見つめている。

——母様、私、また誰も助けることができなかつたよ・・・。

手にした太陽のロッドは、脈動するように光り続けている。虚空を見つめ心の中でそう呟いた少女の頭の中に、突然ある記憶の断片が刺すように入り込んできた。

『肉体の器は完全に復活している。・・・後は魂を容れるだけ・・・。』

『私の命を捧げれば・・・母様は生き直すことができるんだよね？』

『・・・私の娘を、殺さないで・・・。』

『何を馬鹿な！！生死の境を侵すなど・・・』

『・・・私の娘を返せええええ！！』

——！！

アナーニャの思考が急速に動き出す。ほんの一時であったが、少女は一つの結論にたどり着いた。不気味なほど、自分の心臓が震えている。

「・・・シューラ君、助かるかもしれない。」

アナーニャの呟いたその一言で、アイリーンとフィタは正気を取り戻した。同時に彼女のほうへ向き直る。少女の瞳には一点の濁りもない。

「どういう事ですか、アナーニャ！？」

いつも冷静沈着なフィタが、今度はアナーニャの肩をわしづかみにした。

「とにかく今は時間がないの。急いでレチュサ先生を連れてこよう！」

乙女たちは言うがまま、くるりと向きを変え診療所へと急いだ。秀麗な外見とは裏腹に年老いていると噂の名医であったが、聖乙女3人の必死の説得にかかれれば動かざるを得ないのだろう。ぶつぶつ小言を言いながらも彼女達に引っ張られて事故現場まで同行した。

そこではまさに、最悪の展開を迎えていた。

ギンガの若き師範代と国一番の将がお互い間合いをとったまま睨み合っている。間に入ろうとギンガの修行着をつけた少女と、メガネをかけた文官風の若者が隙をうかがっているが、な

かなか都合よくはいかずに苛立ちを隠せずにはいた。また傍の地面では、急速に温もりを失っていく友を涙を流しながら少年が抱え込んでいた。

「聖乙女殿・・・あれですか？一刻を争う怪我人は。」

レチュサは冷淡に尋ねる。

「そうです。」

「私には死体にしか見えないのは、気のせいですかね？争いに巻き込まれるのは御免ですよ。」

アナーニャの答えに、表情一つ変えず老先生は言い放った。だが聖乙女も怯む様子は見せない。

「レチュサ先生、この世界で『死』とはどのような状態を言うのですか？」

アナーニャの問い返しに、少し考えてからレチュサが話し出す。

「そうですね、一言で言ってしまうえば肉体と魂が完全に分かれた状態になることかな。」

「では、『肉体の死』とはどういうことでしょうか？」

「それは、体の全機能が完全に停止した状態でしょうね。」

「でしたら彼の肉体は、まだ生きていますよ。」

レチュサはいぶかしげに眉をひそめた。アナーニャはぴくりとも動かない少年を見据えながら、言葉を続ける。

「だって彼の顔にはまだ血の色が残っているもの。」

「・・・どうしてそれが貴女には分かりますの？」

今まで沈黙を守っていたアイリーンが口を開く。だが、アナーニャから答えは返ってこなかった。

「分かりました、『彼』を診察してみましよう。」

そう言ってレチュサは倒れているシューラの傍まで行き、脈を取った。

「・・・！脈がある・・・どういう事だ？」

老先生のこの言葉は、周りにいた全員を激しく揺さぶった。

「レチュサ先生！！彼は・・・シューラは生きていますか？！」

友人を抱きすくめていたロビンは、泣き腫らした顔を上げて老先生に聞き返す。

「少なくとも、肉体に息はあります。しかし何故・・・」

「深手を負ったように見えても、傷の場所によっては息がある場合もあるんです。」

淡々とアナーニャは語った。今までの彼女では考えられないほど、抑揚のない声だった。

「けれども今の彼を治療したところで、生き返らせることは不可能ですよ。魂が無いのだから。」

レチュサは瀕死のシューラを抱えたまま、苦々しそうに言う。このような老先生の余裕のない顔は、その場にいる誰もが見たことのないものだった。しかし、小さな聖乙女は諦めなかった。

「では魂さえあれば、彼は息を吹き返すのですかね？」

無茶苦茶な理屈だった。本来魂というものは概念的で、実体にしようとしても脆くてあやふ

やな存在だと認識されている。魂がその場に無い状況で元の肉体に戻す術など、この世界には知られてはいなかった。

「・・・魂をこちらに導くことが可能なら、死を免れることができるかもしれません。確率は恐ろしく低いものですが。」

「ならば、シューラ君の魂をこれから取り戻してきます。」

言うが早く、アナーニャは向きを変えて北大路の方向へ歩もうとする。数歩歩いたところで彼女は振り返り、その場に立ち尽くしていた若武者——レイヴンに語りかけた。

「よろしかったらレイヴンさんも一緒にどうですか？・・・認識が変わるかもしれませんよ。」

挑発されたと感じたレイヴンは黙って頷いた。そして赤毛の聖乙女の後を追ってゆく。

残された二人の聖乙女とフレイルきってのつわもの達は、だんだん小さくなる少女と青年の後姿を、ただただ見送っていた。

最初に動き出したのは、アイリーンだった。彼女は無言のまま傷ついたシューラに近づき、跪いて祈りを捧げはじめた。

「ちょ、ちょっと待って！例え聖乙女様でも、死人を生き返すなど・・・」

文官風の若者は、アイリーンを止めるよう慌てて間に入った。

袈裟懸けにされた少年は、誰の目にも屍としか映らないだろう。それくらい少年の傷は致命傷であり、肩から腰までを一刀で深く斬られている。

一度女神か妖魔の元へ伏された人間は、再び現世に呼び戻すことなどできない。

「おどきになって。祈祷の邪魔ですわ。」

それでも乙女は青年を退け、そのまま祈祷を続ける。

「しかし、その少年は経緯はどうあれ殺人鬼として誅殺されたものです！」

「レンカクさん！！シューラを見殺しにしるというの！？」

今度は親友を抱えていたロビンが反論した。泣き腫らした目で睨み付ける様は、傍から見てみると痛々しくも感じる。

「ロビン様・・・ではこのシューラが復活したとして、また修羅鬼に戻ればどうするおつもりですか？今度は貴方が彼を斬りますか？」

あえて感情を抑え、レンカクは静かに問い返した。

「妖魔に魅入られたものは、もう後戻りはできません。このまま死なせてあげた方が、彼にとっても存在を傷つけられずに済むのです・・・。」

若者は苦渋の表情を浮かべる。幼い少年に世の理を理解することはまだ難しい。それに、残酷な現実を穢れなき御曹司に見せるのは、彼としても忍びなかった。

「でも・・・でも！でも！！・・・！！」

ロビンは言葉にならない苦悶の呻きをあげる。せめて嗚咽だけはあげまいと歯を食いしばったが、涙だけはそのままほたほたとシューラの身体に落ちてゆく。

沈黙がその場に立ちこめ、誰も何も言えなかった。しかし。

「ご心配なさらなくても、シューラさんは助かってよ。」

絶望に満ちた表情のロビンに向かい、アイリーンは優しく微笑みかける。

「だって、わたくし達の友が『助ける』と、そう言いましたもの。」

「I wish ～もう一つの奇跡～」

乙女の瞳はまっすぐだった。

「そうですね。奇跡を起こしてこそ、私たちの意義がある。」

フィタもシューラの傍に歩み寄り、アイリーンの隣で祈り始める。

もしもの事を考えてしまう参謀の将は、二人の聖乙女の行為を止めようと動いたが、老先生の腕によって静止された。

「ここは乙女様に任せましょうよ。貴方も見てみたいでしょう？奇跡の瞬間を。」

レチュサはすべてを悟ったような微笑で、レンカクに語りかけた。

一方そのころ、アナーニャとレイヴンは無言のまま大通りを横切り、教会の横を進んでいた。

「乙女よ。あのような大口を叩いておいて、魂が見つからない事はあるまいな？」

なかなか目的地に着かないので、イラついたレイヴンが言葉を吐く。

「大丈夫、今回は迷うことなんてないから。万が一のためにロッド持ってきてるし。」

「・・・お前、本気で女神の裁きが下るぞ・・・。」

日和見な少女の言葉に、思わず本音を出してしまうレイヴンであった。しかし、油断なく気配を計ることは怠らない。

「警戒しなくていいよ、どうせ『彼女』の居場所は一つくらいしかないもの。」

そんな青年を横目で見ながらアナーニャは言った。レイヴンは眉をひそめる。

「『彼女』？」

「そう、『彼女』。会ったらわかるよ。そこにシューラ君の魂もあるはず。」

「・・・何故そう言い切れる？」

「ナイトメア・・・妖魔は、最も穢れた魂を好むからね。果実が熟すように、手に入れた魂が絶望で満ちるまで待ってから喰らうのさ。」

アナーニャの言葉は流暢で、迷いなど一つもないかのようだ。その潔さが、かえってレイヴンにとっては不自然に感じられた。

「聖乙女のくせに、やたらと妖魔に詳しいな。」

レイヴンにとっては何気ない一言だった。しかし一瞬、アナーニャは立ち止まる。

「どうした？」

「な、なんでもない。足が疲れただけ。」

乙女はまた歩みはじめた。だが、その歩みがぎこちない動きであることを百戦錬磨の青年は気づいていた。疑惑の視線を向けられている事に気づいた少女は、歩みを止めて口を開いた。

「私の生まれた世界にも、妖魔は実在していたの。」

青年も思わず歩みを止める。聖乙女とは、この地より安らぎを与えるために女神により異世界から召還された乙女たちだと聞いていた。いわば、平和の使者である。ゆえに、危険に対する認識の甘い、足手まといだと彼は考えていた。

だが、違う。

「・・・いや、実在しているというレベルじゃなかった。私のいた世界では、人間も妖魔もそのほかの異種族達も、絶えずお互いに争ってた。誰かを殺め、その屍を超えなければ生き抜くことはできない世界だった。この妖魔は私の世界の魔族と存在が似ているから、そういう情報に詳しいの。最も、理由はそれだけじゃないけど・・・。」

それだけを言い切り、再びアナーニャは進み始める。意外な事実を聞いたレイヴンだが、あえて何も言わず後に続いた。

そして、少女が歩みを止めた場所は、寂れた旧家の裏にある古井戸の前だった。

「ここは・・・ウトウ家の・・・！」

レイヴンは絶句した。彼らの今いる場所は、かつて『泥騒動』なる事件でキンケイの街人達を震撼させたところであった。いまやあばら家と化しているが、以前は王家剣技指南役として栄えていた家である。

「そろそろ出てきたら？居るのは分かっているんだから、隠れても無駄だよ。」

アナーニャは古井戸に向かって挑発の言葉を投げかける。しかし、古井戸に変化はなく、ただ静寂があるのみだった。

「いやに静かだな。乙女よ、本当にここなのか？」

「ここだよ、間違いない。その証拠に、太陽のロッドが反応しているもの。」

そう言って乙女は光を帯びたロッドを掲げ、薄暗い古井戸のあたりを照らした。すると、黒装束に身を包んだ黒髪の女が、蛍のようにふわふわと浮いている朧の光を抱えたまま姿を現した。

「クッ、聖乙女。どこまでも、この淀に楯突くか。どうせこの少年はもう助かるはずはなかるうに。」

表情を歪めたまま、女は答える。

「助けるよ。そのために私たちはここへ来た。その光を返してもらうために。」

妖魔を目の当たりにしても、聖乙女が臆する様子はない。淀と名乗った女が放つ強烈な瘴気に、レイヴンはその場に立つだけで精一杯だった。

——この気、ただの魑魅魍魎ではない。何故平気でいられる・・・！？

レイヴンは横目で小さな少女の様子を伺うが、乙女は太陽のロッドをかざしたままびくともしない。まるで、ロッドの光に守られているかのようであった。

聖乙女達と妖魔の均衡を破ったのは、その魑魅魍魎達の声にならない雄叫びだった。

「淀姫様、聖乙女など我らにお任せを！淀様がお手を煩わす必要はありません！！」

「うむ、ものどもかかれ！！」

淀姫の号令を天の声とばかりに、魑魅魍魎達は二人に襲いかかってくる。数え30ほどの大群だったが、そこは歴戦の将、レイヴンはシューラを斬ったその刀で化け物を一刀両断していった。

一方、アナーニャは、太陽のロッドが放つ光を大群に向かって照らす。穢れの物たちは悲鳴をあげる間もなく浄化されていった。

妖魔の部下と思われる魑魅魍魎は、半刻もしないうちにあるものは斬り捨てられ、あるものは聖なる光にて消されていた。淀姫はこの世のものとは思えない形相で二人をにらみ、歯軋りする。

「こしゃくなり聖乙女ども・・・妾の怒り、思い知るがいい！！」

妖魔は自身の体から黒い風を発し、その突風は二人に襲いかかった。ロッドによって守られていたアナーニャへは、空を切るように彼女の直前で風は二つに裂けたが、レイヴンは直撃を受け地を踏みしめた構えのままじりじりと押されてゆく。

じかに淀姫の瘴気を受けても、スザク女王の直系子孫にあたる彼はすぐに狂うことはなかったようだ。ただ、彼の指にはめられている質素な指輪が、全身を包み込むような光を帯びていた。

「フン、いかにクシナの加護があろうと、所詮は人。あの修羅鬼のように墮ちるのは時間の問題よ。」

妖魔は羅刹の相のまま嘲笑う。だがその余裕はすぐに消えた。

ふいに聖乙女が太陽のロッドを手放し、レイヴンに向かって放り投げたのだ。反射的に受け取ってしまった青年は、目を見開いたまま手にしたものをながめる。それは、強い光を放ちながら指輪と共鳴し、大いなる力で彼を護る壁となった。

だが、レイヴンは安堵しなかった。唯一の頼りであるはずのロッドを自分によこした乙女は無防備のほずである。いくら女神の庇護下にあるとはいえ、無力であろう少女が無事であるわけがない。

青年は少女を助けるために顔を上げた。その時、彼は確かに見てしまった。

自分の周りに、闇よりも昏い霧を発している聖乙女の姿を。

「どういうことだ！？」

一番動揺していたのは、淀姫であった。女神の加護を受けた、あの忌々しい杖さえ手にしなければ自分の敵ではないはずの相手である。だが実際、乙女の放つ闇は彼女のそれを軽く跳ね返し、じわじわと領域を侵蝕してきていた。

「貴様・・・貴様は一体何者！？」

圧倒的な力の差を見せ付けられ、震えた声で淀姫は叫ぶ。

「彼方達と同じ存在よ。」

アナーニャは静かに答えた。蛇が鼠をにらむが如く、鋭い視線を淀姫に向ける。

「疑問に思わなかったの？なぜあなたの力が私にかき消されたのか。ロッドに騙されたとしたら、とんだお粗末だね。」

確かに思い巡らせば、淀姫はこの少女に邪魔をされた事はあっても、かすり傷一つ負わせることができなかった。

「そんな・・・馬鹿な！！き、貴様はあの女神に・・・」

「聖乙女に選ばれたから自分とは敵対する存在だと？残念ながら、あなたたちが憎む女神はそんなに狭量ではなかったみたいよ。」

自分自身の放つ黒い霧で相手の風を押し戻しつつ、少女は語る。

「私はナイトメアと人間の混血児。殆どナイトメアに近いけど。」

驚愕の事実だった。少なくとも、このダイナスティアの地では在り得ない話だった。

「・・・母様を生き返すために魂を捧げた私は、生と死の境界線を彷徨っていたの。その後闇に還した私を父様が取り戻そうとして、力の負荷に耐えられず、私のいた世界そのものの一部が歪み・・・気づいたら大聖母リデルの前に召喚されてた。彼女は言ったわ、『この世界の光と闇を救って欲しい』って。」

アナーニャの言葉は、淀姫だけでなくレイヴンにも衝撃を与えた。人間を護ろうとする妖魔が存在する事、また妖魔に等しいものが聖乙女に選ばれた事。妖魔は憎むべき存在と思いついていた青年にとっては、そのような事実を受け入れることが怖かった。

「大聖母は人と魔が争っているこの世界を憂いていた。

『貴女の世界では、妖魔と人間が愛し合うことが出来るのを知りました。
ならば、私の作り上げた世界でも光と闇が融和することは可能なはず。
貴女にはどうか、憎みあう光と闇を導いて欲しいのです。』

私は承諾したの。人と妖魔は解りあうことが出来るのだと、私自身の存在を通してこの世界の人々が信じる事が出来るなら、そこに私の存在価値があると思ったから。」

「クッ・・・そんな、そんな世迷言、誰が聞くものか！」

「そう思っているのは、まだ自分が本能だけでしか生きていられない証拠だよ。」

アナーニャの瞳が憂いで曇る。その意味を知るには、この妖魔はまだ未熟すぎた。

「黙れ！黙れええ！！」

淀姫は両手で耳を塞ぎながら、ありったけの力で自身の黒髪をしならせアナーニャに襲いかかる。少女は哀れみに満ちた眼で、本能以外を否定するこの同胞を見つめていた。

「・・・やっぱりこうする他にはないのね・・・。」

アナーニャはそう漏らすと、おもむろに自分の腕をナイフで切りつけた。浅く斬られた手首から赤黒い血が指先を伝い、地に落ちる。それを確認したと同時に目を閉じ、傷口に触れながら小さく言葉を紡ぐ。

次の瞬間、淀姫の周りに混沌が生じた。昏い液体のようなそれは瞬く間に妖魔を包み、そして全てを飲み込んだ。

「さぁお帰り、全てが生まれし混沌の海へ。」

妖魔を飲んだ混沌はアナーニャの言葉が終わると、無言のまま消え失せた。少女の瞳から頬をつたって雫が零れる。

先ほどまで妖魔が居たその場所には、おぼろげな魂が一つ、ゆらりと佇むのみであった。

「・・・大丈夫か？」

レイヴンは、蛍のように見えるシューラの魂を抱いたまま無言で歩く少女に声をかけた。妖魔から魂を取り返し、それを体に戻すべく戻る途中のことである。

「ああ、さっきの事なら大丈夫。・・・慣れてるから。」

アナーニャは傍げに微笑む。今にも泣き出しそうな笑顔だった。

「そうだ乙女よ、この杖を返さねば・・・」

そう言ってレイヴンは太陽のロッドを少女に差し出した。しかし彼女は首を横に振る。
「いいよ、あっちに着くまで貸しておく。正直辛かったから。」
ふいにアナーニャは自分の手のひらを隣の青年に開いて見せる。聖乙女の掌は、火傷のように爛れ無数の小さな傷口から赤黒い血がにじみ出していた。
「・・・これは・・・?!」
「所詮は私もナイトメアって事かな。聖乙女に選ばれたとしても、すべてが聖なる力になっている訳じゃないみたい。」
赤毛の聖乙女は苦笑いした。
「しかし俺を含め、人間を守るために同胞に立ち向かう妖魔を見たのははじめてだ。それでいいのではないか？聖乙女。」
青年の言葉を聞き、乙女はもう一滴の涙を零した。だがすぐに片方の腕で顔をぬぐい、泣き腫らした赤い眼のまま正面を見据えた。
「まだシューラ君を救うまでは気を抜けないよ。急がないと。」
乙女は足を速める。青年は何も言わずに、彼女のあとを続いていった。

五重塔付近まで戻り終えた二人は、屍のごとく横たえた少年を抱く聖乙女達とそれを見守るフレイルの住人たちに迎えられた。
「アナーニャ、レイヴンさん、大丈夫ですか？怪我は?!」
顔を上げたアイリーンが不安げに尋ねる。その様子にレイヴンは少したじろぐが、アナーニャは手の中に収めていた朧の光を差し出して微笑んだ。
「・・・よかった。とりあえずお二人も魂も無事そうですね。おや・・・？」
赤毛の少女の手のひらに気がついたフィタは、立ち上がって彼女に近づこうとする。
「アナーニャ、貴女怪我をしているそうですね。よかったら治療を・・・」
「駄目！！触れないで！！」

アナーニャは首を横に振り、友の誠意を断った。彼女の拒絶の意味が分からないフィタは困惑ぎみに差し出した左手を引っ込める。
「あ・・・ごめんなさい。私のことはいいから、この魂をシューラ君に還してあげて。」
少女はきまりが悪そうに目を逸らしたまま、光を上に掲げる。すると、月光に照らされた光はレイヴンの持つ太陽のロッドと反応し、吸い寄せられるようにロッドの中に収束された。魂を容れたそれは、またもや脈動するように光を強める。
「聖乙女よ、受け取れ。」
持ち主だった青年はそれだけ言い、フィタに杖を差し出した。彼女は無言のままそれを受け取る。
「肉体はほぼ完治しました。あとはこの魂をどうやって元に戻すか、ですが・・・」
月光を浴びて朧の光を帯びる太陽のロッドを眺めながら、フィタは思案にくれた。
身体はある。魂も取り戻した。だがしかし、それを一つにする方法が思いつかない。どうしたものかと天を仰げば、青白い月が静かに佇んでいるだけ。
月を目にしたその瞬間——聖乙女達にある言葉が流れ込んできた。

『昔々、月と太陽は恋をした。
だがそれは許されず、神々は壁を作り二度と会えないようにした。』

月と太陽はとても悲しくて、地上を照らすことをやめてしまった。
すると地は昏く、草木は凍えるようになった。
慌てた神々は二つを合わせるようにすると、生命は命を吹き返した。
・・・貴女は聖乙女ですね？』

聖乙女の間で花園と呼ばれる、彼女達にしか訪れることを許されない楽園に建つ神殿の前で、かかしが教えてくれた昔話の一節だった。この一節だけが何度も頭の中をループする。何度も、何度も。

これは神の啓示か、それとも妖魔の戯言か。手がかりのない乙女たちは考え込んでいたが、あることに気がついた一人の乙女が、顔をあげた。

「光ですわよ！！月と太陽が再会したら、草木は息を吹き返したのでしょうか？！」

聖乙女以外の人間たちには、その言葉が何を示すのか理解できなかった。だが、女神の意志を引き継いだ乙女達は顔を見合わせる。

「太陽のロッド・・・月明かり・・・そういうことですか。我ながら信じられませんね。まさか、奇跡の体現者となろうとは。」

湧き上がる高揚感のためか、フィタの唇がかすかに震えている。黙って二人を見守っていたアナーニャも口を開く。

「二人とも、急ごう。この月光が消えてしまわないうちに。」

ロッドに宿った魂の光は、今にも消えそうである。フィタは太陽のロッドの先端を眠る少年の額にあてがい、そこに神経を集中させた。アナーニャも手をかざす。

そして、聖乙女達の声が重なる。

『恋焦がれし月と太陽よ、我ら願わん。今再び一つとなりて、新しい息吹を与えんことを！』

次の瞬間、すぎましい光が少年を包み込んだ。光はやがて渦となり、月へ向かって昇ってゆく。あまりの明るさに、傍観していたフレイルの住人たちも、そして聖乙女自身も直視することは不可能だった。

光の渦が月へ至ってから少し間があっただろうか。まばゆい光に開放された人々は少しずつ目を開いてゆく。いち早く視力を回復したフィタがシューラの無事を確認しようと、彼の姿を探すが見当たらない。

「馬鹿な・・・！失敗した！？」

「そんなことはなくてよ。」

声の主はフィタに近づいていった。

「シューラ君はここに居ますわ・・・無垢な魂として、ね。」

穏やかに微笑むアイリーンの胸には、布にくるまった赤ん坊が抱かれていた。

「汝が願いは聞き入れられたという事ですか。一瞬焦りましたよ。」

「あら、わたくし達は聖乙女ですよ？失敗なんて有り得ませんわ。」

「・・・アイリーンのその自信はどこから来るんだか・・・。」

悪戯っぽく笑う友に、残る二人は安堵のため息をつく。

「さてと、問題は今後この子をどうするか、ですけど・・・。」

聖乙女といえど、この世界の赤子を寮で育てることは出来ない。ただでさえ世界の均衡を保

「I wish ～もう一つの奇跡～」

つために、聖乙女によるダイナスティア世界の住人への過干渉は極力避けるようにと決められているのである。

「もし宜しければ、こちらで暫く預かりましょう。ほとぼりが冷めた頃を見計らって、ハッカ道場に里子を頼みますから。」

今まですべてを見守っていた老先生——レチュサは、にこやかな笑顔で乙女から赤子を引き取った。同じく傍観していたレンカクが、慌てて引き止める。

「ちょっと待った！！このような事件があった以上、その子はこちらが引き取って・・・」

「おや、生まれたばかりの赤子に何の咎があるというのです？」

「しかしですね、先生・・・・・・・・」

暫く老先生と参謀の将との赤ん坊をめぐる攻防戦が繰り広げられていたが、レチュサは一向に譲る気はないらしい。半刻もすれば完全にレンカクが言いくるめられ、しぶしぶ診療所に一時預かりという形で事は纏まった。

親友の無事を確信した少年が、レチュサに抱かれた赤ん坊の元へ駆け寄る。

「おかえり、シューラ。今度は僕が力になるからね。」

生まれ変わった親友に語りかけるロビンを眺めながら、聖乙女たちは微笑むのだった。

それから、幾許の年月が経っただろうか。

黄金色の髪をたなびかせながら、少年は青白い月を見上げては当時を振り返る。聖乙女達がこの街を闇から救ってくれた、奇跡の夜を。

救われないはずだった。誰もが彼の死を諦めていた。だが彼女達だけはくじけず、最後まで導いてくれた。

握った刀に力がこもる。少年は成長を遂げ、道場の師範代を務めるようになっていた。

——彼女達こそが、本当の女神だったのかもしれない。

そんな事を考えながら、今日も心地よい夜風にあたる。奇跡の時は過ぎ去ってしまったけれど、決して忘れることはないだろう。

「ロビンお兄ちゃん、いつまで外にいる気なの？！風邪ひいちゃうよ！」

道場から幼い子供の呼び声が聞こえた。ロビンは柔らかく笑い、その声に答える。

「分かったよ、シューラ。今戻るから。」

ロビンはそう言うと、シューラの待つ道場へと戻っていった。

Fin